

学生海外調査研究	
中世末期フランスの祝祭における異文化の表象―関連史料収集と伝統祭り調査―	
原口 碧	比較社会文化学専攻
期間	2008年8月20日～9月25日
場所	フランス（パリ）、ベルギー（アト、トゥルネー、ブルージュ）
施設	フランス国立図書館、パリ市立歴史図書館、国立近代美術館ポンピドゥーセンター 附属図書館、アト巨人祭り、トゥルネー歴史大行列、ブルージュ運河祭り

海外調査研究の目的とこれまでの成果

中世末期のヨーロッパでは、宴会や武芸試合、劇の上演、行列を組んでの行進といったさまざまな祝祭が、宮廷や都市において催された。当時の年代記などの叙述や写本に描かれた挿絵を見れば、盛大な祝祭儀礼の様子が今に伝えられる。しかし祝祭は単なる娯楽ではなく、宗教的・政治的主張の場であり、あらゆる象徴表現によってそれらが明確に示されていた。例えば中世都市において行われる最も重要な祝祭のひとつである入市式は、君主が即位や結婚、凱旋の折に市民に迎えられて都市内部へ入場する儀礼である。さまざまな象徴的行為を通して君主の存在を強調させ、あるいは都市との関係を確認させながら、君主の行列は町の中を進んで行く。15世紀における入市式は、しだいに壮大なスペクタクルとなって、複雑な象徴を帯びたパフォーマンスが加えられる。したがって祝祭の意図を知るためには、祝祭プログラムに散りばめられた象徴のコードを読み解くことが必要であり、同時にそれらは社会の背景とともに理解されることが不可欠である。

以上のように、個々の祝祭の意義や象徴表現の分析を主な研究の目的とし、とりわけ15世紀の祝祭においてしばしば見られる「異国的なもの」の表象に関して、目下分析の対象としている。ここで言及する「異国」とは、キリスト教社会であるヨーロッパの「外の世界」を意味する。古代よりヨーロッパの人々は常に東方世界やアフリカの諸地域に関心を持ってきたが、中世においては商人による交易や、軍事的交渉や伝道のための視察、巡礼などによって外の世界とのつながりは存在していた。こうした関心を表すかのごとく、15世紀の数々の祝祭ではお決まりのように、異国的な要素を

象徴的に登場させることが行われている。そこで、豪華な祝祭のエピソードには事欠かない、フランスの大貴族アンジュー家とブルゴーニュ家の宮廷の例を挙げてみたい。アンジュー公ルネは1455年に3日間続く盛大な聖史劇の上演を命じているが、その演目には古代のインドが舞台となる物語を選び、そして彼のお気に入りへのムーア人奴隷を登場させている¹。またブルゴーニュ家でも、数々の祝宴の余興で「ムーア人の踊り子」、「奇妙な獣が生息する、インドの神秘的な森」の見世物、「ラクダに乗ったサラセン風の男」などが登場し、エキゾチックな雰囲気を演出している²。こうした演出は当時の宮廷社会における流行であり、数々の祝祭の場において見つけることができるのだが、当然のことながら限られた情報の中で、中世ヨーロッパの人々はどのように外の世界の他者を捉え、表現したのかという疑問が生じる。そしてまたそこにはどのような意図があったのだろうか。

まず挙げられるのが、異国の雰囲気を表現することが富や権力の象徴であったということである。布地を例に挙げると、東方やアフリカから渡ってきたものは産地別の名前で呼ばれていたが、その由来の詳細は定かでなくとも、その産地の名前はそのまま贅沢品という意味合いを含んでいた。また同じようにヨーロッパに生息しない動物や植物を所有することもステータスであり、彼らの動物園にはさながら宝物殿といった様子で、象や豹、ラクダ、孔雀などの大型動物も見られ、それらは戦や遠征の際に持ち帰ったり、外国の王から贈られたりして、はるばる遠方から持ち込まれた「贅沢品」であった。そして、こうした装いや動物などによって異国渡来のものを見せびらかし、あるいはそうしたテーマを設定して、未知の世界の非日常的な雰囲気

気を楽しむために、祝祭という場は絶好の機会であった。

その一方で、非キリスト教徒の住む異国への恐れと警告が表現される場合もあった。あらゆる見聞録は、外の世界の驚異ばかりでなく、怪異をも人々に伝えており、聖書はそれらを反キリストとして暗示していた。とりわけ15世紀はオスマン帝国の侵略の危機が身近に迫った時代でもある。ブルゴーニュ宮廷において1454年に盛大に催された「雉の饗宴」の余興では、擬人化され女性のかたちで表される「キリスト教教会」と、大男が演じる「サラセン人」が登場する³。ここでは前年のオスマン軍のコンスタンティノープル陥落という背景があって、擬人化された「教会」と「サラセン人」は、危機に瀕しているキリスト教社会に対して、打破すべき異教徒への恐れと敵対心が表現されているのである。

以上のように祝祭の中における異文化の表現には、憧れと恐れといった相反する二つの意識が見られるのである。おそらく身近にないものに対するこうした対極の意識は、いつの時代においても存在するものであろう。しかしながら、限られた情報しか入ることのなかった15世紀の人々が表現するそれらは極端であった。さらに多くの祝祭における異文化の表象を分析するとともに、その表象がどのような情報によって実現されたのかを明らかにすることが求められる。そしてそこから、当時の異文化への認識や交流への理解が可能となるだろう。

史料として必要となるのは、まず祝祭の詳細な記録である。年代記、覚書、日記などが挙げられるが、15世紀のフランス王家、アンジュー家、ブルゴーニュ家に関して叙述を残している人物は何人も存在し、とりわけ多くの資金を費やして歴史編纂に力を注いだブルゴーニュ家に関する史料は豊富である。またこうした歴史叙述の他に参照されるのは宮廷の会計簿である。祝祭における出費、あるいは布地や調度品、動植物など異国渡来のものがどれほど存在していたか明らかになると同時に、宮廷に抱えていた外国人についての給金・衣装などの記録も見つけることができる。それに加えて宮廷の蔵書目録もまた、人々の関心の程度を知る上で有用である。異国の知識を得るために用いられたのは言うまでもなく書物であり、アジアやアフリカに関する古代の著作家やそれを継承する中世の知識人・歴史家による著作、そして旅行記、それらを参照する百科全書や東方世界にまつわる伝説物語などがそこに含まれる。また、以上の文字史料に加えて図像史料も不可欠となる。当時の祝祭自体を描いた図像が現

存している例はわずかだが、写本挿絵や絵画の中で描かれる異国の人物や調度品などからも、多くの示唆を得られることが期待できる。

調査の概要 ①史料調査・収集

以上のように15世紀の祝祭の記録に関して史料の豊富なフランス王家、アンジュー家、ブルゴーニュ家を中心として、祝祭空間における表象とその背景を分析することを目的に、この度の調査において中心となるのは、現地の図書館での史料収集及び史料調査である。

まずフランス国王戴冠式、聖別式、入市式等の儀礼の記録を綴った*Le cérémonial françois*⁴の閲覧及び複写。本史料は17世紀の編纂集であるが、フランス王家の儀礼がどのように行われたかを知る重要な史料のひとつである。儀式の次第や参列者の衣装の記録に至るまで細かく記載されているのが特徴である。次に、アンジュー家の会計目録*Les Comptes du roi René*⁵。15世紀のアンジュー家に関する会計目録は、まとまったものでは2種類存在し、刊本として入手しやすい*Extraits des comptes et mémoriaux du roi René*⁶とともに重要な史料である。これらの記録によって、異国渡来の品物がどれほどアンジュー宮廷に存在していたかを知ることができる。同様にブルゴーニュ家の目録の編纂集が、*Les ducs de Bourgogne*⁷である。これらの史料の閲覧・複写を中心に、パリ市内の図書館にて調査を行った。

利用図書館はパリのフランス国立図書館、パリ市歴史図書館、国立近代美術館（ポンピドゥーセンター）附属図書館の3館である。まず、現在5つの館（リシュリュー館、フランソワ・ミッテラン館、アルスナル館、オペラ座館、ジャン・ヴィエール館）で構成されるフランス国立図書館Bibliothèque nationale de France（略称BNF）であるが、もっとも新しく蔵書数の多いのがフランソワ・ミッテラン館である。近代的なその建物は一般利用者用の地上階と、研究者用の閲覧室である地下階に分かれており、この度の調査では主にミッテラン館の研究者閲覧室において閲覧・複写作業が中心となった。ほとんどの蔵書は閉架であるため、館内にある検索端末から必要な資料をオンライン蔵書目録Bn-Opale Plusによって検索・予約し、カウンターに届くのを待つ。古い蔵書はマイクロ化されており、*Les Comptes du roi René*はマイクロフィッシュ、そして*Le cérémonial françois*はマイクロフィルムによる閲覧となった。マイクロ資料の複写は書籍と異なり各自で行えるようになっている。複写機は2台しか設

置されていないため、たまたま故障のため1台のみ利用可能であった複写機への行列に長時間待たされることもあったが、システムに慣れれば効率よく調査は進み、また目的の資料のほかに国内で見つけることのできない複数の学術論文⁸の収集を行えたことも含め、大きな収穫が得られた。

次にパリを中心にイル・ド・フランスに関する歴史資料を所蔵するパリ市立歴史図書館Bibliothèque historique de la Ville de Paris (略称BHVP)である。国立図書館ミッテラン館に比べるとはるかに旧式の当館では、オンライン蔵書目録が存在するもののすべての蔵書を網羅しきれておらず、そうした資料は館内の目録カードの中から見つけるより方法はない。パリ市立の11館を数える専門図書・資料館に所蔵される600万冊の蔵書のうち、現時点でオンラインで検索できるのはいまだ75万冊である。幸い担当教授により情報をいただき、目的の資料である*Les ducs de Bourgogne*の所在が当館にあることは把握していたため、閲覧までにはさほど時間を要することはなかったが、開館時間の短さ(平日13時～18時、土曜日9時半～18時)とともに、国立図書館の徹底したデジタル化と比べると不便さを感じずにはいられない。しかしながら古い建物が残されるマレ地区にあり、16世紀末に建てられた歴史ある館内の雰囲気と落ち着いた中庭は魅力的である。

そして気軽に利用できて頻繁に通うこととなったのが国立近代美術館(ポンピドゥーセンター)附属の図書館Bibliothèque publique d'information (略称BPI)である。こちらは登録などの手続きが一切不要で、開館時間も長く、さらに開架式であるため大変便利な図書館である。多くの利用者であふれる館内には貴重書の類いが収められることこそないが、それでも国内にはない研究書が開架で発見でき、また図版を求めて手当たり次第閲覧できることは大きなメリットである。したがってBPIでの作業はそうした有益な研究書⁹を閲覧・複写するとともに、主に15世紀の写本挿絵や絵画において描かれる異文化の図像を画集や美術研究書などから探し出し、資料の所蔵先を調べることを行った。

調査の概要 ②伝統祭り調査

こうした図書館における史料収集を続ける合間に、調査におけるもうひとつの目的であった伝統祭りを訪れるためパリを離れた。今につづく祝祭空間を体験するためである。フランス国内の祭りは、暦に多くの祝祭日があるように、一年を通してそれを祝う行事も多彩である。しかしながら調査期間であった8月末～9

月にかけてはフランス国内では中世の面影を残す祝祭はほとんど行われていなかったため、隣りのベルギーの都市を訪れることとなった。

フランス語圏であるエノー州の都市アトの巨人祭りDucasse d'Athは、新・旧約聖書や黄金伝説、中世武勲詩の登場人物の巨大な人形が町を行進する、15世紀起源の祭りである。2005年にユネスコの無形遺産に指定されたこの祭りは、アトの住民の誇りであり人々は自らを「巨人の町」と謳っている。8月の第4週末、町の人々や近隣の住人、観光客で通りはあふれ、アトの町のシンボルである黄・紫・白の三色の組み紐を首に下げたり、髪飾りにしたりする人々の姿も見られる。祭りは、ゴリアテの結婚式、教会でのミサ、ダヴィデとの戦い、7体の巨人と山車、楽隊、兵隊などによる行列の行進という流れで、2日間にわたって進められていく。とりわけ祭りの最高潮に達する巨人たちの行進と人々の興奮は、中世末期の都市での、行列や宴会の余興における演出と雰囲気をイメージさせられるものとして印象深い。何しろゴリアテは1481年から常にこの行列に参加しており、また中世武勲詩に登場する4人の子供を背に乗せたシュヴァル・バイヤールの出現はさらに古く、1462年(もしくは1463年)と伝えられている¹⁰。このように巨人やその他行列の構成グループの出現はそれぞれ異なり、そこには時代背景が映し出されている。また行列にはやはり中世における祝祭と同様に、異国趣味的表象も含まれていた。しかしこの祭りでは15世紀の発祥当時からではなく、時代は下って19世紀に加えられたという。真っ黒な体をして未開の人間を表した凶暴な「野蛮人」と、彼を取り押さえる水兵たち。鎖でつながれた野蛮人は必要以上に暴れて見物人たちにも暴言を吐き、滑稽な見世物として演出されていた。異文化の表象が、祭りにおいて時代を超えて必要とされてきた様子がここに窺える。祭りの詳しい資料は博物館La Maison des Géantsにて収集することができた。アトの巨人祭りとともに、その他の地域での巨人祭りの紹介及び比較がされていて興味深い。それによるとベルギー、フランス、スペインなどを中心に各地の町で巨人祭りが催されてそれぞれに個性を出していたが、アトのように整った博物館が存在する例は多くはなく、それだけにこの町での調査の意味は大きかったといえる。

一方もうひとつの祭りは、同じくエノー州、フランス国境の都市トゥルネーでの宗教行列La Grande Procession de Tournaiである。やはり中世を起源とするこの祭りも同様に、年に一度、9月第2週目の土曜日に町の中を行列を組んで歩くのだが、アトの賑やかな

祭りに比べて宗教色が強く厳かな雰囲気である。祭りは、1190年にペストがこの町に蔓延し、それが鎮まるよう祈って宗教行列を行ったことが始まりである。以来、たった一度—1566年の略奪者が町を占領された年—を除いて毎年行列は行われてきたという。町の中心となっているノートルダム大聖堂から出発する行列は数名のグループを形成して、さまざまな聖人像や聖遺物匣を小ぶりの神輿に乗せて担いでいる。そして老若男女が修道士や悔悛者、もしくは中世風の色鮮やかな衣服を身にまとい行列に参加するのである。トゥルネーでは中世末期、宗教行列のほか聖史劇も同様に、災害が治まるのを神に祈って上演したという記録が残されている¹¹。こうした祈りの表現がこの町にとって常に身近なものであったことが窺えるだろう。またトゥルネーにおいても、教会で販売していたこの宗教行列についての資料を手に入れることができ、それらは今後の考察に役立つことと思われる。¹²

調査の成果と今後の課題

以上のようにこの度の海外調査においては、研究対象である中世末期のフランスの祝祭において特異な表象として印象づけられる「異文化的なもの」について、複数の文献・図像史料を収集するとともに新しい見解を提示してくれる研究論文との出会いが大きな収穫であったといえよう。またアトとトゥルネーの両祭りを訪れ、もっとも実感したのは祝祭がまさに時代を反映しているということであった。祭りのプログラムの基本は決定されているだけあって、時代の流れによって起こった、ある小さな変化がその中で際立つのである。両祭りは、テーマとして掲げる15世紀の祝祭の異文化表象に直接関わるものではなかったが、祝祭の意義を問いたず上で、祭りにおける象徴表現のあり方を実見し、そしてその場に参加して人々の様子を感じとることは、大きな意味を持つこととなった。祝祭はそれぞれの地域や時代の自己表現となって当該社会を知る上で大きな手がかりを示してくれるのである。そして古来より各地でさまざまな祝祭行事が行われてきた日本について応用することもできるだろう。この度の海外調査において収集した史料の一部を踏まえた研究報告を、2008年10月の表象芸術論領域研究発表会において口頭発表するに至っている。さらに今後は史料の分析を行い論文を執筆し、『人間文化創成科学論叢』への投稿を予定している。

注

- 1 LECOY DE LA MARCHE, Albert, *Le roi René. Sa vie, son administration, ses travaux artistiques et littéraires d'après les documents inédits des archives de France et d'Italie*, Paris, 1875, 2 vol., v. 2, p. 142.
- 2 LA MARCHE, Olivier de, *Mémoires*, éd. Henri Beaune et Jean d'Arbaumont, Paris, 1883-1888, 4 t., t. 2, p. 353, t. 3, pp. 137, 197.
- 3 *Ibid.*, t. 2, pp. 361-366.
- 4 GODEFROY, Théodore, *Le cérémonial françois, tome premier contenant les ceremonies observées en France aux sacres et couronnemens de roys, et reynes, et de quelques anciens ducs de Normandie, d'Aquitaine, et de Bretagne: comme aussi à leurs entrées solennelles: et à celles d'aucuns dauphins, gouverneurs de provinces, et autres seigneurs, dans diverses villes du royaume; tome second: contenant les ceremonies observées en France aux mariages et festins: naissances, et baptêmes: majoritez de roys: Estats generaux et particuliers: assemblées des notables: lits de justice: hommages, sermens de fidelité: receptions et entreveuës: sermens pour l'observation des traitez: processions et Te Deum*, Paris, 1649.
- 5 ARNAUD D'AGNEL, G, *Les Comptes du roi René publiés d'après les originaux inédits conservés aux archives des Bouches-du-Rhône*, Paris, 1908-1910, 3 vol.
- 6 LECOY DE LA MARCHE, Albert, *Extraits des comptes et mémoriaux du roi René pour servir à l'histoire des arts au XVe siècle*, Paris, 1873.
- 7 LABORDE, Le comte de, *Les ducs de Bourgogne. Études sur les lettres, les arts et l'industrie pendant le XVe siècle (1849-1851)*, Paris, 1873.
- 8 *Fêtes et cérémonies au XIVe-XVe siècles, actes des rencontres de Lausanne (23 au 26 septembre 1993)*, Neuchâtel : Centre européen d'études bourguignonnes, 1994. / *Rencontres médiévales en Bourgogne : XIVe-XVe siècles*, Université de Reims Champagne-Ardenne, Centre de recherche sur la littérature du Moyen-âge et de la Renaissance, 1991. / BEAUREPAIRE, Charles de Robillard de, *Entrée et séjour du roi Charles VIII à Rouen en 1485*, Caen, 1854.
- 9 LAFORTUNE-MARTEL, Agathe, *Fête noble en Bourgogne au XVe siècle : le banquet du Faisan (1454) : aspects politiques, sociaux et culturels*, Paris, 1984.
- 10 MEURANT, René. "Contribution à l'étude des géants processionnel et de cortège dans le Nord de la France, la Belgique et les Pays-bas" *Arts et traditions populaires*, 2, 1967., pp. 125-128.
- 11 PETIT DE JULLEVILLE, Louis, *Les Mystères*, Paris, 1880, 2 vol., t. 1, p.196-200.
- 12 またブルージュの運河祭りについては、3年に一度開催され壮大なスペクタクルをともった祭りで、都市のあらゆる場所が舞台となってブルージュの歴史を語る演劇が行われる。それは中世特有である場面ごとに役者と

観客がそれぞれの舞台に移動する、並列（同時）舞台を思わせ興味深かったが、1963年より開催されるようになった比較的新しいイベントであるとして、ここでは言

及することを控えたい。ブルージュにおける中世以来の祭りとしては5月に開催される聖血の行列がある。

はらぐち みどり／お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科 比較社会文化学専攻

【指導教員のコメント】

原口碧さんは、修士論文で、聖史劇を中心に中世フランスの祝祭について考察しましたが、その過程で、異国の文物や異国的な服飾が少なからず登場していることに気が付き、博士論文では「異国的なもの」の表象を通して祝祭の象徴性を読み解こうと研究を進めています。武芸試合、演劇、行列行進などの催事に関する記録は断片的で、回想録や会計簿、写本挿絵など各種の文書、図像史料に分散しています。幸いアンジュー家とブルゴーニュ家については、かなりの記録が刊本として校訂出版されていますが、多くは17～19世紀に刊行されたものです。したがって、こうした資料がまとまってある現地の図書館で調査することは、原口さんの研究にとって基本的な作業です。今回の調査旅行では、未だ研究の充分でないこの領域で、新たな関連論文も見つかり、研究は大きく前進したはずですが、また伝統的な祭りを実見したことも、「異国の」研究者として時に大きな誤解に陥ってしまう危険を避けるために、行うべき基本です。異文化接触の問題は普遍的なテーマであり、原口さんの研究内容は日本におけるこの問題を考える上でも有効です。

（お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科 教授 徳井 淑子）